

人・課口拾人であり、忍人の家の同住者は不課口貳拾六人・課口拾貳人である。

エチゼンノクニグントウチヨウ 越前國郡

稻帳 正倉院文書中に存する斷簡で、江沼郡・加賀郡の天平三年定郡稻その他が記されてゐる。

エチゼンノクニセイゼイチヨウ 越前國正

税帳 正倉院文書の中にある斷簡で、天平三年二月に上つた江沼郡及び加賀郡の天平二年收納正税穀并額稻雜用の解である。この文書には、江沼郡の郡司主政外從八位上勳十二等膳長屋、主政外大初位下勳十二等江沼臣大海、主帳外少初位上勳十二等江沼臣入鹿、主帳元位財造住田、加賀郡の郡司大領外正八位下勳十二等道君、主政外從七位下道君五百島、主政外從八位下勳十二等大私造上麻呂、主帳外初位上勳十二等道君安麻呂、主帳元位丸部臣人麻呂の名がある。江沼郡の大領は郡稻帳に見える正八位下勳十二等江沼臣武良士なのである。

エチゼンノクニゾウブツシユウノウチヨウ

越前國雜物收納帳 天平勝寶七年九月廿六日の正倉院文書斷簡である。その中に加賀郡去年海損米及び加賀郡司解申年所春米が記されてゐる。

エチゼンババ 越前馬場 白山の三方馬場

の一つで、越前下山の神宮寺であり、惣名を平泉寺というた。白山記に『越前下山七社平泉寺白山三所權現奉崇之』とある。

エチゼンマンザイ 越前萬歳 金澤では、

毎年正月越前國野大坪の農民等、城下に来て萬歳を演じ、武士の家に就きて米錢衣服を得、二十日に至つて去るを例とした。蓋し前

田利家が同國府中に治した時、野大坪は恐らくその封邑に屬したと思はれ、隨つてその農民が、利家の加賀に就封した後も來り祝する慣習を生じたのであらう。堀麥水の三州奇談にも『元和元年世靜謐なる時、三河の者共家康公の御下の百姓なりとて、江戸へ出て賀儀を申上げ田舎諸幸若ひて御引出を貰ひ來る。是三河萬歳の初なり。是を聞きて越前府中にも、難嶽の下の者共、加賀利家公の御下の百姓なりとて、金澤に行つて賀儀を申上げ、御酒飯など下さるゝ上にて、卑賄小舞せしより事始る』といへるは、極めて穩當の説である。然るにその後越前萬歳の來ること漸く多きを加へ、夜に入るも尙市中を徘徊するのみならず、服裝亦華麗を極めたから、天明七年正月十日その九人を召喚して譴責したことすらある。

エチゼンムロ 越前室 白山の頂にあつた。

越前名蹟考に『此室大御前の正面なる故御前室ともいふ。一の瀬より御前室へ四里。往古は八の室ありといふ。今も大師堂・護摩堂あり。平泉寺の僧毎夏參籠す』と見え、今の室堂のある位置である。

エチゼンヤ 越前屋 金澤の家柄町人で兩

家あり、共に片岡氏であつた。その家傳に、越前府中近邊東片岡村に片岡空遍が居り、西片岡村には空遍の兄休應が居た。休應の子孫兵衛、空遍の子喜左衛門共に府中で前田利家の御用を承つたが、後に金澤に移り、孫兵衛は明暦元年に銀座を命ぜられて、寛文四年に免ぜられ、喜右衛門は寛文七年金屋彦四郎に代つて銀座となり、延寶七年に町年寄となつたとある。

エチゼンヤカクセイ 越前屋敷生 觀生と書かれたものも見えろ。小松泥町の人。通稱宗右衛門、堤氏。金蘭集に元祿二年七月廿六日觀生亭にて、『ぬれてゆく人もをかしや雨の萩 芭蕉』とある。

エチゼンヤダイジヨウ 越前屋大常 金澤

の俳人。通稱を次郎兵衛といひ、英町に住して足袋・蓑を營業とした。俳諧を梅室に學び、初號龍居、後槐庵五代を繼席。新奈・明ほのの著がある。

エツガザツキ 越賀雜記 越賀記ともいふ。

上巻は越前、下巻は加賀、追加は越中の治亂に關する事柄の雜記で、系圖・軍記・消息・朱印狀等を種々集めてゐるが、その内一向一揆の消息などは最も貴重なものである。著者は石川郡宮腰の人鶴屋興三右衛門。

エツガトウソウキ 越賀關譯記 ↓カエツ

トウソウキ 加越關譯記。
エツガホンガンジツキ 越賀本願實記 十五册。北國に於ける一向一揆の顛末を記したもので、巻尾に天正の年號があるが、江戸時代の作である。京都帝國大學附屬圖書館所藏に係る。

エツガンソキン 悅巖素忻 金澤天徳院八

代の住持。寶曆十二年三月十三日寂。
エツゾウカン 閱藏觀 河北郡二日市誓入寺の僧北山・哲僧父子が相謀りて、嘉永五年自坊の傍に建てた學寮で、哲僧の生存中は繼續した。
エツソウジ 悅叟寺 鹿島郡田鶴濱に在つて、曹洞宗に屬し、天正八年長連龍が、その兄綱連菩提の爲に之を建て、瑞松院悅叟良喜の法號に因みて、瑞松山悅叟寺と號したに起

り、東嶺寺四代の太嶺祖楯を開山とする。寺藏絹本着色長好連像堅六六種横五一種は重要美術品に編入せられ、又絹本着色釋迦三尊像堅九七種横三九種は鎌倉末期の作かと認められてゐる。

エツチユウザカ 越中坂 河北郡河村郷に屬する部落。

エツチユウセイバツ 越中征伐 天正十二年以降前田利家は佐々成政と雌雄を争うて、何等徹底的の勝敗を見ること能はなかつたが、十三年五月秀吉は久しからずして北征の途に上るの意あることを利家に告げ、更に七月十七日出師を報じ、八月四・五日先鋒を發せしめ、八日自ら出馬した。是を以て利家は直に迎接の準備に従ひ、十七日には前田安勝以外の能登の諸將に、悉く津幡に出て軍令を待たしめた。秀吉は十八日松任驛に至つたが、利家は之を路傍に迎へた。十九日利家前軍に將として發し、二十日俱利伽羅に陣し、廿二日安養坊坂に至り富山城に肉迫した。秀吉も亦吳服山に布營して勢威を示したが、成政はその途に敵すべからざるを知つて廿九日降を容れ、秀吉は之に新川一郡を與へた。次いで秀吉は八月朔日陣を芹谷野に轉じ、二日富山城を巡視し、三日には吳服山に於ける利家の茗宴に臨み、四日・五日國中の掟を定め、六日軍を旋して俱利伽羅に向かひ、七日金澤城に入つて、利家の一族利久・安勝・秀繼及び重臣村井長頼・不破直光・長連龍・高島定吉・中川光重等に物を賜はつた。秀吉がいつ金澤を去つたかは明らかでないが、十四日には越前府中に在り、十七日には近江坂本に納馬した。後秀吉は九月十一日附自筆の狀を以て、利家に